二〇二四年一一月二二日

草虱取り合ひ和む吟行子　　むべ
肩撫でて太さ確かめ大根引く　　千鶴
紅葉愛づ紅絨毯に寛ぎて　　董雨
西方の落暉にま向く枯蓮　　ぽんこ

二〇二四年一一月二一日

硝子屑揉むやに沖の冬日浪　　たか子
洗はんとカーテン外す窓小春　　康子
一日を誰とも会はず日短　　澄子
冬ざれのダム湖響かせ鷺叫ぶ　　千鶴

二〇二四年一一月二〇日

干し物を取り込みをれば綿虫来　　明日香
たつきとす玉葱植ゑや冬うらら　　千鶴
冬灯紙漉くやうに湯葉張りぬ　　えいじ
陣離れゆくは恋路の鴨ならむ　　きよえ
冬来たる間遠に灯油売りの声　　せいじ
友禅の百花展べたる冬座敷　　澄子

二〇二四年一一月一九日

冬日燦飛鳥源流なる女淵　　明日香
ままごとの紅葉の皿の忘れ物　　康子
巡拝す寺から寺へ京時雨　　もとこ

二〇二四年一一月一八日

石蕗の黄を籬としたる手水かな　　せいじ
お茶室は千客万来庭小春　　あひる
竹林の岐かれ径なる石蕗の花　　せいじ
満々と溢る御手洗小鳥来る　　ぽんこ
北風に負けまじと踏むペダルかな　　澄子
おでん酒無口の彼が饒舌に　　千鶴
枯菊となりても香りなほ高く　　うつぎ

二〇二四年一一月一七日

春く日無垢の秋天薔薇色に　　むべ
清掃日色葉斑に透く袋　　うつぎ
手術痕撫づ祈りの手あたたかし　　なつき
一渓を満艦飾にはぜ紅葉　　たか子
広き森左見右見して紅葉狩　　ぽんこ
道小春杖を伴とし投票へ　　きよえ

二〇二四年一一月一六日

手に取ればレザータッチや散紅葉　　せいじ
朱を極む散紅葉選り栞とす　　澄子
冬木立砦としたる古墳かな　　明日香
重ね着の血液検査おほわらは　　もとこ

毎日句会みのる選・二〇二四年一一月二四日